

震災を乗り越えた石巻の子供たち

7月6日、石巻市の南境第4団地の仮設住宅で、私たちはボランティアを経験してきました。集会所で同じように子供たちと接するボランティア活動を行っている「SAVE チルドレン」と協力し、ブロックやちゃんばらごっこなどで子供たちと遊びました。子供たちは元気に走り回り、様々なことに興味を示し体験する様子でした。初めて会った私たちにも人見知りなどせず、心を開いてくれている様子でした。ただ、集会所の場で乱暴な行動や言葉を発する子も見受けられ、子供たちのストレスの発散の場とボランティアの方々の協力が今後も必要だということを感じました。

このボランティア活動は、NPO 法人「にじいろクレヨン」の紹介によるものです。にじいろクレヨンとは任意団体から NPO 法人となった会社組織です。代表の柴田滋紀（しげき）さん(37)に、お話をお伺いしました。

彼によると、この組織は、“未来の社会を担う子どもたちの健全育成を通して心豊かな明るい社会づくりに貢献します”という理念を基に、仮設住宅などを訪問し子供たちのやりたいことをサポートしています。

震災直後は気持ちが荒れている子供たちが多かったようです。ボランティア活動の始まったとき、子供たちの心の問題が多く、原因もわからないままでした。そこで、子供たちの問題を少しでも減らすにはどうしたらいいか、試行錯誤しながら活動していました。その為、まず初めに行ったのは、ストレスケアの場をつくることからでした。たくさんの被災者がいる避難所を活動場所として選びました。

しかし、避難所の方々に理解を得ることには苦労を強いられました。なぜなら、子供たちの遊ぶ場所より食べ物や寝る場所を確保しなければならず、ボランティア活動の場所提供は後回しになっていました。それでも、子供優先で物事を考え活動したいという柴田さんの強い思いから、活動は続けられて行きました。

出来た仮設住宅の多くは公園を潰して建てられています。そのため公園の近所に住んでいた子供たちや仮設住宅に住んでいる子供たちの遊ぶ場がなくなってしまいました。多くの子供たちは危険な仮設住宅の駐車場や通路で遊ぶことが多かったそうです。場所が危険であることと、他の住民がストレスを感じてしまったため、子供たちが気軽に集まれる場所を作ろうとしました。そこで、住民の許可を取って団体の集会所を借りることにしましたが、子供のいない家庭などの理解を得ることは難航を極めました。

集会所を借りるために市の許可を取りに行くと、市の

担当者から「住民の許可なしには貸すことが出来ない」と言われ、住民に許可を取る作業が始まりました。一度場所を提供してもらった仮設住宅の方々には、その後も何度も足を運ぶことで、活動への理解を得ることができるようになり、現在では協力的に場所を提供してもらえるようになりました。

日を追うごとに被災者の方々のボランティアに対する態度も変化していきました。震災後は子供たちの親御さんも疲れやストレスにより、子供に無関心になりネグレクト（育児放棄）のような状態になることもありました。理解を得られていないボランティア活動に対しても冷たい目向け、活動自体に興味を示さない人もいました。しかし、現在では子供たちの両親や仮設住宅の方々と信頼関係を築くことができています。同じように、団体の活動にも感謝してくれるようになり、挨拶や日常会話などを交わすことも出来るようになって今では良好な状態を保つことができています。

震災直後は被災者の心が荒れており、ボランティアをする人へ怒りをぶつける人も多くいました。反論や口答えが出来ないため、傷つくボランティアの人も多かったそうです。その上、親御さんや子供が言うことを聞いてくれないため、ボランティアの体力・精神面がきつい状態が長く続きました。ついには、「ついていけない」と辞めていく人も少なくありませんでした。6人いた社員も半数が辞め、3人になってしまったそうです。

一緒に活動してくれるのはにじいろクレヨン社員に加え、他県からの参加者です。他県の方々にも心境の変化がありました。震災直後は何かをせずにはいられないという一方通行な気持ちが勝っていました。1回きりの活動で終わってしまう人もありましたが、時間が経ち、子供たちの変化が感じられるようになると、何度も足を運び活動してくれる人も現れました。現在では他県からの継続参加者や、残ってくれた社員が、精神的な負担を跳ねのけ子供たちのために活動しています。

にじいろクレヨンは今後の活動期間を10年と設定して、子供を中心としたコミュニティを作ろうとしています。その最初のモデルケースとして仮設住宅を選びました。震災での経験は辛く厳しいものが多いですが、正しい心のケアをしていくことで経験をプラスに捉えて日本の将来を担うような人になって欲しい、と柴田さんは語ってくださいました。

（鈴木愛佳、佐藤美紀、小沼実実）



ボランティア活動への住民感情

2011 年秋、私たちは石巻市渡波(わたのは)で、在宅者を対象に、東日本大震災後に行われたボランティア活動についてのアンケート調査を行いました。渡波は、石巻市の東部沿岸地域に位置し、甚大な津波被害を受けた地区です。調査の主な目的は、ネット等で流れているボランティア迷惑説が本当なのか調べることです。

そのアンケートの中から、ボランティア活動における「プラスの影響」と「マイナスの影響」についての回答をピックアップしてみました。

まず、「ボランティアの活動におけるプラスの影響がありますか？」という質問に選択肢、「話相手ができる」「町が活性化される」「元気付けられる」「特になし」「無回答」「その他」の 6 項目を設けました（複数選択可）。

その結果、「話相手ができる」18 人、「町が活性化される」20 人、「元気付けられる」60 人、「特にない」13 人の回答があり、「その他」には、「車をもらった」「ボランティアがいたからきれいになった」「とても助かった」「前向きの人の気持ち」「どぶ掃除をしてもらった」などの意見をいただきました（無回答 9 人）。

そして、ボランティアの活動におけるマイナスの影響がありますか？という質問には、「声がうるさい」「交通渋滞の原因」「感情を傷つけられる」「特になし」「その他」の 6 項目の選択肢を設けました。

結果は、「声がうるさい」2 人、「交通渋滞の原因」7 人、「感情を傷つけられる」0 人、「特になし」82 人、「その他」では、「マイナスの影響があったとしても助かった」「考えたことがない」「文句のつけようがない」「マイナスはないと思う」という意見をいただきました（無回答 7 人）。

この二つの質問に基づき、ボランティアが迷惑かそうでないかという質問に答えるならば、ボランティアは迷惑ではないという答えになります。ボランティアに対して、数パーセントの否定的な回答はありましたが、大半の回答がボランティアへの肯定的な意見であり、多くの方がボランティアに感謝されているからです。

プラスの影響では、「元気付けられる」「話し相手ができる」という回答が多くありました。この結果から、私は、ボランティアの方が被災地に入り、活動することで被災者の方に会話をする場を提供しそこで、被災者の方が抱えている不安・心細いなどの感情、思いを内に秘めずに外に発することができ、負の感情を緩和し、被災者の方を前向きな気持ちにさせる事ができていたのではないかと思います。

私たちが渡波でアンケート調査を行っていると、お家に招いていただき、震災当時のお話をしていただくという経験をしました。お話をしていただけたのも、私たちの訪問が、会話のきっかけ作りになっていたからだと思います。東日本大震災において、在宅避難者は支援が届きにくかったと言われることがあります。私たちの調査がそのような被災者を少し元気付けることができたと思えば、うれしいです。

(永田清龍、菅原悠太郎、松原明広、工藤達也、金野千春)



仙台・宮城 DC 販売促進会議で防災研修PR

私達、丸岡ゼミナールの学生は、5 月 28 日、ホテルメトロポリタン仙台において、来年の開催を予定している「仙台・宮城デスティネーションキャンペーン (DC)」の「販売促進会議」に参加しました。この会議には宮城や岩手県の一部の市町村から旅行代理店や観光関係者約 700 人が集まりました。私達も特設の大学ブースで旅行会社への PR 活動を行いました。

DC とは、JR グループと地元の自治体、観光事業者等が共同で実施する大型観光キャンペーンです。これは 2008 年の秋にも「仙台・宮城」で開催されており、お馴染みのマスコットキャラクターの「むすび丸」もこの時に生まれました。

私達のゼミもブースを設置して、防災研修とこれまでの活動についての展示をしました。私たちはこの『石巻復興 NEWS』、丸岡先生やゼミ生による防災研修の実績、石巻専修大学を含む宮城県内大学の復興大学製作の「防災すごろく」の紹介と展示を行いました。

今回私達の目的は今後、被災地石巻で観光に代わる防災研修の可能性を展示物やタブレット PC などを用いて PR することでした。私達のゼミのブースでは、被災した日本製紙石巻工場に、3 月 11 日震災当時の被災体験を直接伺いに行き体験談をもとに防災研修のプランを紹介しました。また、学校や教育機関向けの「防災すごろく」については、タブレット端末上で体験してもらい、防災研修の実施に関心を持ってもらうよう努めました。

他のブースでは涌谷町の「桜まつり」や大崎市の温泉水の展示、色麻町の「シャクヤクまつり」など明るいイメージで売り出しており、人を引き付けていました。その一方で、私たちの防災研修がこのような観光の代わりになりうるのかが、要検討の課題です。

防災研修の PR は、東日本大震災で被災し観光施設などほとんどが失われた石巻の事情を反映したものです。これは、通常の観光 PR とは性格の異なるものです。が、体験談や実話などを元にした防災研修は今の石巻ならではの価値があり、私たちは、石巻の経験を後世の防災に活かすという意味でこれは意義の大きな活動だと考えています。旅行代理店の方々にも興味を持って頂けたと思います。今後も機会をとらえて、石巻の経験を伝える活動を行いたいと思います。

(小久保敬太、菊地駿)

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

E-mail senshu-maruoka@inter7.jp